

寄稿文

堂垣内尚弘先生の足跡を訪ねて (iii)

— スラウェシ島 (セレベス) —

道路情報館

技術士 (建設部門) 真田 英夫

はじめに

堂垣内先生が、所沢航空整備学校教官から南方へ転出したのは昭和18年12月であった。転出先は、濠北派遣軍第二航空軍飛行第七師団 (兵団符号襲)・第二十一野戦航空補給廠・兵器課長として、任地はインドネシア・ハルマヘラ島・ワシレである。昭和18年12月21日岐阜の飛行場から上海—マニラ—バナイ島—アンボイナ島—ハルク島を経てハルマヘラ島ワシレに着任したのは昭和19年1月下旬であった。

ハルマヘラ島ワシレでは、後続の本隊も到着し兵舎、資材輸送路の建設責任者として軍務に従事していたが、昭和19年8月中旬、本部隊のセレベス島 (現スラウェシ島) 転属の準備のため先遣隊長としてマカッサルに派遣され、本隊の到着を迎えることなく

当地のリンブンで終戦を迎えた。

昭和21年5月堂垣内先生がパレパレ港から引揚げ船で帰国の途について60年を経た平成18年12月スラウェシ島にその足跡を訪ねた。

A・R・ウォーレスがアジア区とオーストラリア区の動物を境界としてセレベス海峡に引いてから、セレベス島の東のパンダ海に引き直すほど複雑な島である。

マカッサル

日本統治時代 (1942年4月～1945年8月) のマカッサルの人口は約8.5万人程度であったが、現在は人口120万人を超え旧市街の境界から二廻りほど大きく市街が広がっている。

マカッサルはインドネシア独立後ウジュン・パン



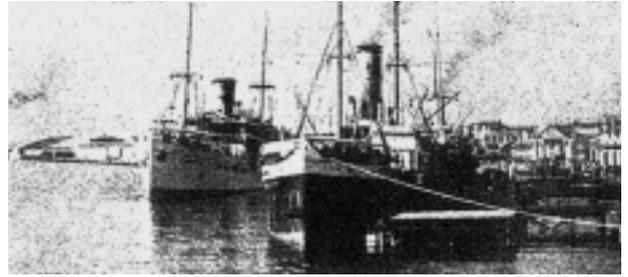
スラウェシ島 (セレベス島) 位置図

ダンと改名したが、1999年パタビ大統領の時に元名のマカッサルに戻った。この町は“そよ風の町”と

呼ばれるそうであるが、訪ねた06年12月の日中は30°Cを越える暑さであった。



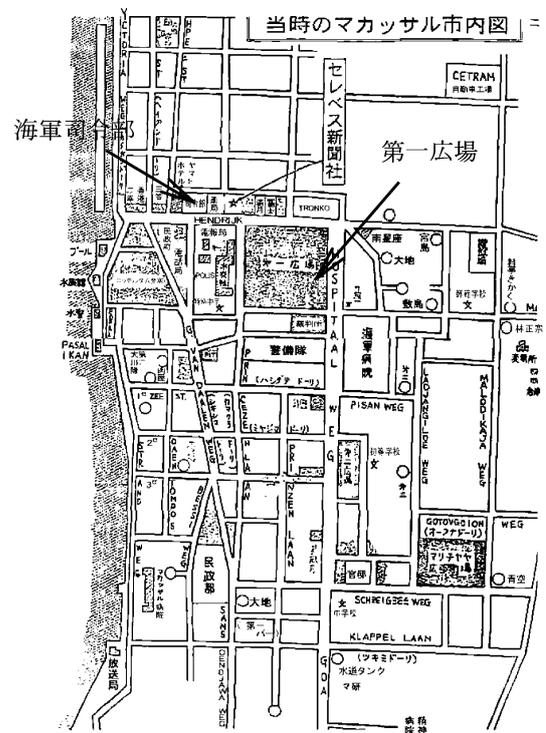
マカッサル空港



マカッサル港



マカッサル空港ターミナル



戦前のマカッサル（1943年頃）



南スラウェシ州詳細図



マカッサル ゴールデンホテルからの海岸



“輪タク”も並んで人々にぎわうマカッサルの市場
=昭和18年



左の白い建物（現銀行）が堂垣内先生が泊まっていた
旧オランダホテル跡



マカッサル海峡を望みかつてはマカッサル市街を見渡す場所であったが、要塞も内陸部となり博物館となっている。



昭和18年のマカッサル海岸



ベンテン・ウジュン・パンダン
(ロッテルダム要塞) 入口



海岸司令部の跡（昭和19年8月、着任の挨拶に行った）



要塞からのマカッサル海峡

リンブン

堂垣内先生（第二十一野戦航空修理廠中隊長）の部隊はマカッサルの空襲が激しくなり、昭和20年3月頃マカッサルから約30 km 南方にあるリンブンに移転した。

リンブンは畑地の中の小さな町で郊外の市場には地元の魚菜類が売られていた。



リンブン市街

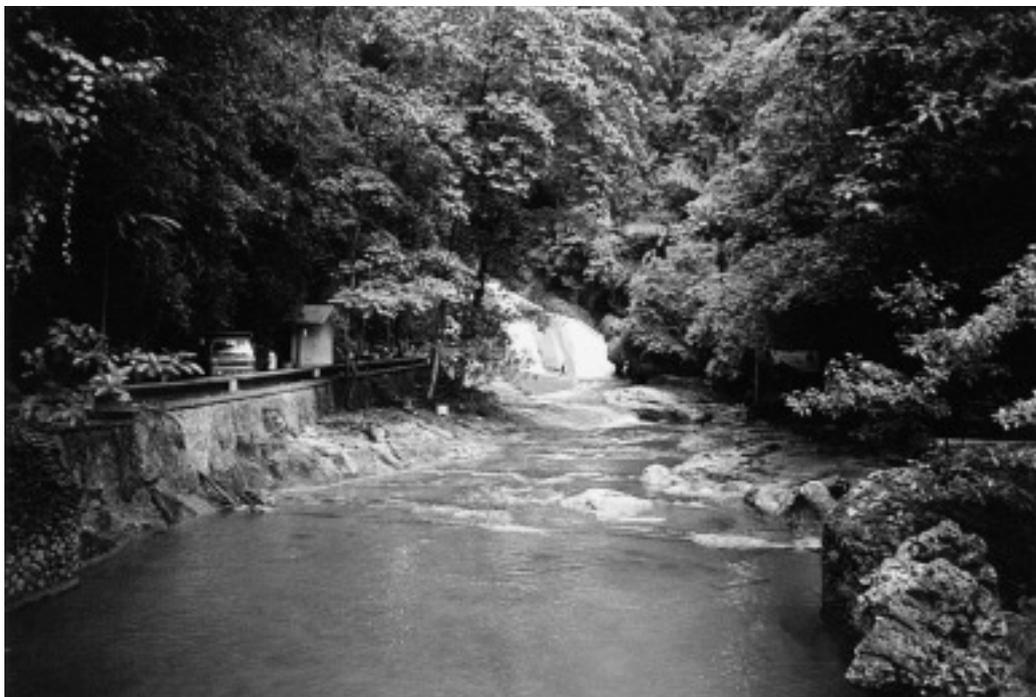


リンブン市街

パンティムルン公園

マカッサルから40 km のマロス川の中流の位置にあり蝶の谷と呼ばれA・R・ウォーレスが蝶を採取した場所である。午後4時頃の公園は蝶が数匹であった。

蝶売りの少年に聞くと午前～昼頃までがエサを求めて多くの蝶が見れるとのことである。ウォーレスの「マレー諸島」にこの谷の事が書かれている。



滝

パレパレ港

パレパレはマカッサルから北へ約130kmの位置にあり車で4時間の行程である。途中の道沿いに水田、エビ養殖、漁師街と素朴な景色が見られる。

パレパレ港はマカッサルに次ぐ第2の港で、海岸沿いに市街がありその後ろにゆるやかな丘が広がっている。港の丘の中腹には日本軍の壕が残っていた。

堂垣内先生は昭和21年5月18日、この港から日本に向け帰国した。

パレパレは、中部の観光地トラジャを訪れる人々の中継地点で、丘の上にはマカッサル海峡を望む見晴しの良いレストランがあった。



日本軍のトンネル跡

おわりに

第12回北海道土木技術会の研修旅行は、ジャワ島中部地震の被害復旧状況の視察とスラウェシ島（セレベス島）に堂垣内先生の足跡を辿ってマカッサルを訪ねた。研修旅行行程は下記である。

日程 平成18年12月2日～8日

行程 千歳→成田→デンパサール（乗継ぎ）→マカッサル（2日）→ジョグジャカルタ（3日）→デンパサール（乗継ぎ）→成田→千歳

視察団は北海道工業大学 神谷光彦団長・北見工業大学 鈴木輝之先生・池田晃一・石塚学・下倉宏・武田覚・高橋誠司の各氏と真田の8名である。



パレパレ市街



パレパレ港